

---

# カサなるキオク

青空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カサなるキオク

### 【Nコード】

N5602A

### 【作者名】

青空

### 【あらすじ】

ただ愛がほしかった。そのためなら全てを捨てたかった……。けどそんなこと誰も望んじやいなかったんだ。

## 第1章 交差するそして時に平行になる（前書き）

この小説は人が死にます。 >br<後なんかもう迷路みたいな小説なので注意して読んでください。

## 第1章 交差するそして時に平行になる

檜原称汰は病室のドアの前にいた。

こんこんと数回扉を叩き、称汰は了解の返事もないままドアを開く。

「はいるよ」

一步はいると彼女の香りが称汰の鼻をかすめる。

ベットに横たわる女性には、規則正しい呼吸音だけが生と死を確かめる唯一だった。

誰もいない。

夕暮れのオレンジの光がカーテンを越えて鮮やかに部屋を染める。彼女もオレンジに染まっていた。

彼女の黒い髪が光に反射する。その様が目に焼き付いて離れない。称汰は持ってきた花をそっと女性の顔の横に置く。それでもピクリとも反応しない。死んでしまったのか？ 称汰は彼女が呼吸していることを確かめる。

いつか起きる。

確かなことなのに不安になる。

カーテンを開けるとオレンジがより濃くなった。周りの景色もオレンジだということを確かめる。

ふわりと頬を撫でると少し反応を示した。そして数秒後に目を開けた。

「おはよ」

「おはよう、いつから寝てた？」

称汰が髪を撫でながら聞くとそれが気持ちいいのか顔をほころばせながら「少し前から」と答える。

そんな嘘にも慣れた。本当は朝から寝ているのは知っていた。少しづつ眠る時間は増えていく。

それは運命なのだ。

「眩しい」

「あ、ごめん」

シャツと急いでカーテンを閉める。

彼女は起きあがり、称汰が持ってきた花を持ち上げる。称汰からだと分かれると花ビンにそつと挿した。

称汰はその様子をじつと眺める。

「私の顔に何かついてる？」

「……………うん。そろそろ帰るよ、もう遅いし。また来るね」

「うん」

称汰が帰るとき少し切なそうに、でも何か耐えるように手を振る。

称汰はそんな姿を見て見ぬ振りをする。

「愛してるよ」

その言葉を言うことだけが君にしてあげれること。

どうかそんな切ない顔をしないで、耐えないで、俺に全てをぶつけてくれてもいい。大丈夫だから。

オレンジの光が段々薄れていき青紫に変わる。星がちらつき始める。

称汰は急いで上着を着てドアノブに手をかける。彼女の今している表情が分かる。でも振り返られない。

愛している。それは偽善か？ 愛情か？

称汰は帰りの道を少し小走りで帰る。

『今日』は生きていた、でも、『明日』は死んでしまうかもしれない。でも彼女にそんな不安はない。もう、【余命は宣告されいるのだから。

後数ヶ月後に彼女は死ぬ。

せめてさよならは言いたい。最後に愛しているとも、言いたい。

家のドアにつくころにはもう真っ暗だった。病院から家まで結構

な距離がある。自転車などで行けばいいのだが鍵が紛失中で不可能だ。

「ただいま」

「おかえり、ご飯できてるわよ」

「うん、食べる」

向こうから美味しそうな匂いが漂ってくる。

今日はカレーか、とよだれが自然と口の中に溜まる。

「その前に手を洗いなさいよ」

すぐ食べ始めようとする称汰に母が制止の声をかける。称汰はピタツと食べる始めようとする手を下ろす。逆らったらせつかくあるカレーは取り上げた。

それだけは勘弁して欲しい称汰は急いで洗面所に駆け出す。

冷たい水が手をぬらす。

「ちべたっ」

軽く洗い流すような感じで洗う。

父さんはまだか、と称汰はひょここと首だけ廊下に出し、玄関の靴を確かめる。

最近残業が多いとは聞いたけどもう7時半、前は6時くらいには帰っていたような気がする。

なおも冷たい水を出し続ける蛇口を止める。タオルでさっとふき急いでカレーの待つ食卓へと向かう。

称汰はドアノブに手をかける寸前で手を止めた。母の怒鳴り声が一枚のドアの向こうで聞こえる。

称汰はとばかりを避けるためそおと2階に上がった。

自分の部屋にはいると大きくため息をした。

少しちらかった部屋を見渡しまたため息をつく。

そろそろ片づけどころだとおもい脱ぎ捨ててある服を集める。

称汰のつま先にカツンと軽く何かが当たった。

「写真、立て？」

表を向けると彼女と称汰が写っていた。女性は寒そうにマフラー

に顔を埋め、いや赤くなつた顔を隠すようにうつくまっていた。

初じめてのデートの時のか、と納得し机に立てかける。あの頃はこうなる何て思いも寄らなかつた。

「懐かしいな」

そう言い、また掃除を再開する。

狭い部屋だし、数分で掃除は完了した。ぐうと鳴るお腹を見つめそろそろ修まったかと下へ降りる。

怒鳴り声は聞こえない。

少し音がしてドアが開く。

母はいなかつた。冷めたカレーはまだそこにあつたので称汰は椅子に座り食べ始める。

ここに母さんがいたらまた手を洗いなさいと言われるところだ。不意に電話が鳴る。

称汰は急いで電話にでる。

「もしもし」

「あ、お前か」

「父さん。なに」

「……………今から帰る。母さんはいるか？」

称汰は少し戸惑い「いない」と答えた。

父の声色が少し変わる。焦るような、少し苛立った声になった。

タンスの右から2番目のところにある封筒を持って、玄関にくれと言われたから称汰は急いで封筒を探した。

奥の方にあつた封筒はすこしすり切れていた。

それから2時間後父さんが泣きはらした顔をした母さんを連れて家に帰ってきた。

称汰はおずおずと封筒を渡した。

「ありがとう」

父さんからのお礼の言葉なんて久しぶりだなと称汰は苦笑した。称汰は気恥ずかしさで顔をしたに向けた。そして横にいる母に目

線を移動させた。

「母さんと父さんな」

齒切れが悪いように父はとぎれとぎれに称汰に言った。

称汰はその父の様子だけで胸が締め付けられた。その先はもう聞きたくなかった。

「母さんと、父さんな……………離婚、するんだ」

予想通りの答えに少し笑いがでた。じゃああの封筒の中身は離婚届か？　ずっと前から用意していたんだな。

何でこうなったのか何て知らない。今まで普通に家族をしてきたつもりだった。称汰は外に飛び出していた。

遠くで父さんが何か言ったが聞こえなかった。

称汰は無我夢中で走った。夜の肌寒い空気が称汰を刺した。

涙で前が見えなかった。

称汰の中で何かが壊れた。

この後の会話も何もかも今までの会話も全て、全部、夢にしたかった。

「っ……………はあ……………はあ……………くっはあ」

息が苦しい。木にもたれかかる。足に力が入らなかった。

あの「ありがとう」も最後だからか？　離婚届を渡してお礼を言われたのか？

もう何も考えられないくらい称汰は参っていた。

笑いが込み上げてきた。渴いた笑い声が切なく響いた。

「あ、はは……………あははは、は……………あ、はははあははっ」

笑っているのに涙がこぼれる。これからどうやっていけばいい？　家族ごっこが得意な父親なんてもうみたくもない。じゃあどうしたらいい。

答えはひとつだ、家族ごっこに混じればいい。



＊

家に帰ったとたん殴られた。

「お前はっ心配したんだぞ！」

怒鳴る父の顔には涙があふれていた。体中泥だらけで探し回っていたのが分かった。

だが、そんな父の姿にさえ称汰は何も感じなかった。

「ふうん。心配、か。母さんや俺を簡単に捨てられるお前なんてっ」

称汰はひとつ間をあけて「死んじまえ」と叫んだ。また頬に痛みが走った。

父が称汰の上にまたがり殴った。

称汰の耳に母の泣き声が届く。

もうどうでも良かった。

殴られても殴られても全然痛くなかった。

「もうやめてっ！」

遠くで母さんが泣いていた。

称汰は彼女の病室にいた。

「おはよ」

「今日は顔色良いな」

称汰はベットの近くにあるパイプ椅子に座り彼女の頬を撫でる。

昨日より赤みがかかった頬を見て笑った。

彼女は嬉しそうに俺の手に手を重ねた。温かった。

呼吸音が聞こえる。

俺たちはしばしそのままだった。俺は彼女の体温を手から感じた。心地よい温度に目を瞑る。後どれだけこのこの体温を感じられるかは分からない。ただそれまで感じていたい。

触れるだけのキスをした。

この瞬間だけ昨日のことも彼女の病気のことも全て忘れた。

「なんかあった？」

彼女が称汰の髪を触りながら聞く。今日は本当に気分が良いようだ。

「ん、なんでもない。大丈夫」

称汰は泣きそうになりながら答える。

彼女の細い手を握りしめる。痛くないように力を加減する。

その手からは熱いくらいの温かさがあってほっとした。まだ生きると考えた。

「……ほっぺた、腫れてるよ」

「うん」

「ほんとになんにもない？　ね、しょーちゃん自分の顔見てみて、泣いてるよ」

称汰は自分の頬を触った。でも濡れていないことがすぐ分かった。

「泣いてないよ」

「泣いてる」

「泣いてない」

「泣いてるよ」

「泣いてなんかいない、ほら見て」

握りしめていた手を引いて自分の頬に触れさせる。

「ね、俺は泣いてないよ」

そう言うと頬にある彼女の手にほっぺたをつねられた。小さい痛みが走る。

彼女を見ると泣いていた。頬になん筋もの涙が伝わる。俺は急いで手でぬぐう。ぬぐってもぬぐってもあふれる涙に戸惑う。

「顔、が……泣いてる」

一言、言つと下を向いた。

称汰は彼女にはうそを付けないと苦笑して彼女を抱きしめた。体中に彼女の体温が伝わる。

「ごめん」

謝るべきか悩んで一言だけ言った。

家に帰ると暗かった。誰もいないとすぐに分かると二階に上がった。

片づけたばかりで綺麗な部屋を見渡す。ふと、昨日置いておいた写真立てが目についた。

もう、こんなことはないだろうなと思い、元の位置に戻す。ベットのの上に体を倒す。すぐに睡魔が来て称汰は眠りについた。

\*

「と、いうことで頼む！ 俺の顔を立てるためと思って！」

数少ない友人のせっぱ詰まった願いを叶えるため称汰は合同コンパ、略して合コンに来ていた。

友人曰く“ちょー可愛い子”だそうだが称汰は興味がなかった。

そのせいで今日は病院に行けなくなってしまったからだ。

焦りと不安があふれ出す。

今日は【予定日】より3週間くらい早い。

「ね、名前なんていうの？」

騒ぎから抜け出してきた女が称汰に話しかける。

「檜原称汰……」

「ふうん。ね、暇なら抜け出しちゃお！」

女は称汰が口を開く前に腕をとりカラオケボックスを出ていた。夜も遅く周りには人気がない。

「私は、ゆうみ。ヨロシクね」

「あ、うん」

称汰はめんどくさそうに答えた。

ゆうみは称汰が気に入っただのか、腕を絡める。称汰はうざったそ

うに振り払う。

「私、しょうたくんのこと気に入っちゃった。ね、私と付き合おうよ！」

「わるいけど、俺好きな子いるから」

「んじゃ、2番目で良いよ！　ね、付き合おうよお！」

称汰は疲れたのか家への帰り道を歩き始めた。ゆうみはその後を追いかける。

「絶対に私の方が良いよ。そうしなよ」

称汰はことごとく無視し続ける。不意に携帯が鳴った。

称汰は急いで携帯を取り電話にでた。母が息を切らした声で喋る。手から力が抜け、携帯を落とす。称汰は気づいたらあの時と同じように走っていた。

遠くでゆうみが何か言っていたが無視して走り続けた。

ついたところには彼女の両親も、称汰の母となぜか父までもいた。称汰はなぜ父がいるのか問いただしたかったが感情を抑え彼女の元に行く。

彼女の顔は白い布があった。

「う、そだろ……おいっ起きろよ！　おい！　起きてくれ！　頼むからっ！　目を、目を開けてくれ……っ！」

何度呼びかけてもピクリとしなかった。

触れても何も伝わってこなくて、死んだということがすぐに分かって、無性に泣きなくなつて、気づいたら涙があふれてた。

周りの人たちが遠慮をしたのかいなくなっていた。彼女の親の方が辛いはずなのに、と称汰は思いもせずただ泣き続けた。

気づいたらまわりの景色がモノクロに染まった。全ての色が色褪せて称汰は力無く床に膝を付けた。

床には称汰が流した涙で濡れていて、膝をぬらした。

称汰は近くの壁を殴った。何度も何度も血が出ても殴り続けた。自分の無力さに吐き気がする。

彼女が自分を呼ぶとき俺はどこにいた。

馬鹿みたいな集まりに馬鹿みたいにいた自分を恨んだ。

あの時、数少ない友人だろうとたった1人の親友だろうと、断れば良かった。称汰は今日自分に声をかけた友人さえも憎んだ。

称汰の中でまたひとつ崩れるモノがあった。

もう何もかもが無意味で不必要な気さえた。

病室を出ると雨だった。おきまりだな、と苦笑がでた。

このまま雨に触れて肺炎になればいい、とさえ思ってきた称汰に母でさえ声をかけなかった。

「あ、しょうたくん！」

ゆうみは称汰を見つけると駆け寄った。傘を差し出す。

今の称汰には今日会ったばかりのゆうみでさえ恨み、憎みの対象だった。

称汰はゆっくり立ち上がりゆうみから傘を受け取る。

「あ、あの」

「ね、あんた俺のこと気に入ってたんだろ？」

称汰は冷えた笑みでゆうみを見る。ゆうみは顔を少し赤くさせる。さつきまで付き合おうと言ってせがんだ大胆さはなかった。相手から言われるのには慣れて無いようだ。

「でも、俺はおまえなんか大嫌いなんだよ……俺がお前を愛することなんて無い。俺が愛するの生涯たった1人だけだ！」

称汰はゆうみを押す。バシャと水が跳ねた。ゆうみは恐怖の顔で称汰を見る。

「お前じゃない」

「あ……そ、のしょう、たくん？」

ゆうみが称汰に触れようとする。称汰はそれを残酷にも振り払い冷たい笑みでゆうみを見る。

何度も心の中で叫ぶ「彼女は悪くない」と、だがそんなことさえ無視するほど称汰は壊れた。

両親の離婚、最愛の人の死、全てが彼を壊した。

「さよなら。あ、風邪をひかないように」

称汰はゆづみに傘を手渡す。

恐怖で震える手はなかなか傘を握めない。涙があふれる。

称汰はそんなゆづみを無視し、母のところに行く。母は何も言わずタクシーを呼んだ。

「ま、待つてよ！」

タクシーに乗り込む称汰の腕を必死に握む。

「……………濡れるから、離せ」

称汰が睨むとゆづみは素直に手を離れた。

称汰は無言でタクシーに乗る。母が行き先を言い、後は無言が続いた。

母は称汰には何も聞かなかったし、言わなかった。称汰もなぜあそこに父さんがいたのかは聞かなかった。聞いてもしようがないと感情を抑えた。

## 第2章 偽りは時に真実になり真実は時に偽りになる

目を閉じてても開けても写る世界は白と黒、灰色しかなかった。  
何の音も聞こえない。

手を伸ばしても空を切つて。彼女の顔が浮かばない。

タクシーの中で母は一言だけ喋った、「彼女、言つてたわよ。笑つてて、て……」 称汰はそれを聞いても何も答えなかった。

称汰笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔、全ての表情を落としてしまった。  
空が黒に染まる。

称汰は静かに息を吐いた。体が動かなかった。

「笑えない。泣けない。お前がいらない世界で俺は何をしたらいい？」  
問いかけてもなにも返つてこない。

頭の中の彼女は少し照れたようにうつむいて笑った。

あの時、あれだけでた涙はもう流れない。

あの時、あれだけ悔やんだ思いはもう無い。

すべて落としてきたのだ。

ゆうみに投げかけた冷酷な笑みももう無い。

すべて捨てた。

もう必要がないから。

彼女がいらない世界で表情はいらない。

優しさも悲しみも必要性を失ったから。

繋いだ手。触れる唇。撫でる手。携帯の着信音。濡れる床。叫ぶ声。

不幸が重なり彼女は1人で死んだ。

称汰は携帯を投げた。

無惨にも床に転がる携帯を見つめて、目をそらした。  
全部が鬱陶しかった。

＊

夕日のせいで全てが赤になっていた。

「来てくれたんだ××××」

「あ、はい……………すみません」

「うつん、なんで謝るの？」

首を横に振ると彼女はまた窓の外に顔を向ける。

「これ、母さんから。あなたへって」

持ってきた花を側にあった机に置く。

彼女はピクリともせず窓を見続けた。

「あの、俺、もう帰りますね」

突っ立ったままに疲れ、ドアノブに手をかける。

「また来てね」

その時、体が硬直したのを覚えている。

でもなんで？

いつも呼ばれていたはずなのに。

慣れているはずなのに。

初めて呼ばれて、そして間違われたような感じがする。

称汰は帰った。

手を力無く振る彼女を残して。



\*

どこかの記憶にずれがあった。

\*

「称汰！カニがいるよ」

「そんなにはしゃぐなよ！××××、お前も早く来い」

駆け寄ると彼女がカニに指を挟まれていた。

称汰が苦笑いしながらカニを指から放した。

「お前がカニの邪魔すんのが悪いんだろ」

「だってっ！」

彼女は怪訝そうに称汰を睨む。

「はいはい、うっし。泳ぐぞつと、て……××××何突っ立ってんだよ、ほら行くぞ」

名前を呼ばれた男の子は操られるように手を引かれた。

その後は夕方近くまで泳いでいた。

帰りは電車で、彼女も称汰も寝ていた。

男の子はそんな二人を遠くで見ていた。

幸せそうに……

\*

自分自身の記憶に間違いがある。  
それはパズルを解くように、ひとつひとつ明らかにっていく。  
でもどこかで邪魔が入る。  
あの少年は誰？

\*

「おい、あれ、お前の兄きじゃね？」  
少年は言われたまま友人が指す方向を見る。  
称汰と彼女が恥ずかしそうに、けれども幸せそうに歩いていた。  
「かああつ羨ましいな」  
男の子は目を細めながら少し二人を見つめ、視線をずらした。  
そして、友人の服の袖を引っ張り、走っていった。

見たくない。  
壊したくない。  
男の子は遠くで二人を見つめた。

\*

どこかで栓をした。

あふれ出す思いを止めるために。

罪悪感を感じないために……

そして彼女はその栓を抜いた。

俺自身の今までの思いが、感情が全部押し出された。

あふれてもあふれても尽きることがない思いが。

彼女の一言であふれる。

止められない。

彼女自ら抜いた栓を、彼女を愛する俺が止められなかった。  
怖くて。

恐ろしくて。

いつのまにか自分を偽って。

いつのまにか自分が一番傷つくことをしていた。

「母さん」

傷つくのが怖い。

それが一番俺自身を傷つけていた。

そして閉じた。

聞くのが、問いかけるのが怖くて。

ああ、そうか。そうなんだって納得できる俺が怖くて。  
触れたら壊れるガラス細工を俺は自分で壊した。

粉々に砕いて。  
消えればいい。

「俺の名前は-?」

\*

全部が全部嘘で出来たおもちゃだった。

称汰は笑った。

扉の前でにこやかに発つゆうみに対して。

『笑った』-…

それは冷酷な笑みでも暖かな笑みでもなくただの笑い。  
感情もなにも込められていない笑い。

「こんにちわ」

「よくここが分かったな」

愛の力、と笑うゆうみを無視して扉を閉める。

だが、それも止められる。

「あげてよっせつかくきたんだし」

称汰は変わらず笑った。

それは肯定でも否定でもない。

なにを考えているのかなに思っているのかも伝わらない。  
称汰は静かにため息をついた。

「じゃあ俺の名前を言えたら入れたげる」

「しようたくんでしょっ」

ああ、そうだったな。

「はずれ」

確かに、そうだったよ。

俺は『称汰』だったよ……

「それじゃあ」

ゆづみは止めることをしなかった。

いや、止められなかった。

はずれ、と言ったときの彼の心が読めなかった。

前のように傷ついているわけでもない。

怒っているわけでもない。

悲しんでいるんでもない。

なんにも。

そう、無だった……

「もう違うんだ」

俺はもう『称汰』じゃないんだ。

もう、『称汰』じゃなくていい。

役目が終わったんだ。

一時の夢だったんだ。

「違う違う違う違う違うっ！俺は違う！違う！」

全部嘘でした。

ちゃんちゃん。

それで終わって欲しかった。

彼女は死んでいなくて。

俺は『称汰』で。

ゆづみと出会わなかった。

でも、全て、本当で。

唯一の嘘は俺が『称汰』ということだけ。

それだけが嘘。

そして最大の罪。

「あはは……は、はあははあははっははっは、はっあはは……は」

もう止められない。

全部が全部真実で偽りなのだから……

今更、全部無かったことになって出来ない。

全部が回り始めてしまったのだから。

### 第3章 死にきれない思い、そして化膿する心

「母さん、いる？」

暗い部屋。

でも人の気配がある。

『あの日』から母はおかしい。

何をするにも上の空だった。

俺は自然と視界に母さんを入れなかった。

見たくない。

父さんと分かれて悲しむ母の姿なんて……。

「ねえ、俺の名前ってなんだったっけ？」

彼女は俺を見ない。

「ねえ、母さん」

この人はいつまで父さんを追い続けるのだろう。

「…………俺の名前、なんだっけ」

病院にいた父。

『称汰』の恋人の彼女。

その死に悲しむあいつ。

そんな権利などない！そう、叫んでやりたかった。

そして聞いてやりたかった。

なんで母さんの隣にいる？ -

\*

おかしい。おかしい。おかしい。おかしい。

異常。

信じられない。

信じたくない。

これは夢。

目覚めればすべてが幻影でそして、愛おしい人が目の前で笑っている。

無造作に手は受話器を握りしめていた。

父の携帯にかける。

でなくれ。

でなくれ。

でなくれ。

で。

『はい、浅野です』

その瞬間もうどうでもよくなった。

「お久しぶりです。……俺だよ」

もう『あいつ』はいない。

血はつながっていいおうともう『あいつ』は父さんじゃない。

『称汰か？』

「へえ。まだ覚えてたんだ」

『……何のようだ』

もう何も関わりがないんなら遠慮する必要はない。

言ってしまうおう。

それで、終わり。

「母さんが倒れた」

あいつは今どんな顔してる？

「あんたと離婚してから日増しに病態が悪化していくんだ」

せいせいしてるのか？

「まだ、俺らに情があるなら」



それとも、  
「見舞いに来てくれ」  
つらいのか？

電話は切れてしまったように静まりかえっていた。  
何を考えているんだろう。

嫌なら断ればいい。  
でもそうはしない。

たった一つの『会いに行く』理由がある。  
あいつは来る。

『……………わかった』

「ありがとう、父さん」

そして、さよなら。

もう俺には何も無い。

母さんにしてあげれること、それはなんだろう？

これで正しかったのだろうか…………。

もしかしたら望んでいなかったのかもしれない。

もういい。

\*

病室のドアをたたく。

ドアを開けば彼女がいる、そんな錯覚が頭によぎる。

でもそこには唯一の肉親と憎むべき人。

俺は平静を保てるのかな。

大丈夫。俺は全て捨てた…………もうなにも残っていない。

「本当に、来てくれたんだ」

ああ、来るだろうな。

あいつは望んでいたはずだ。  
いつか呼び出されることを。

会いに行くいいわけができることを、あいつは望んでいた。  
あつかましく待っていた。

「……………すぐ出て行く」

「そう」

静寂。

母さんは眠っている。

少しだが顔色がいい。

俺は安堵する。

これ以上大切な人は失いたくない。

そして、失ったときの喪失感、絶望感をもう味わいたくない。

「父さん、なんで離婚したの？」

聞きたくない答え。

会話を作るためとはいえ最悪なことを聞いてしまった。

後からの絶望感がひどかった。

また後悔だ。

あいつはたつぷり間をおいてから口を開いた。

「おまえが壊れていきそうだったからだ」

「えっ」

耳を疑った。

俺？

壊れそう？

何を言っているんだ。

「……………おれのせいで、おまえがおかしくなったんだと思った」  
何を、

「おれと兄さんを重ねているんだと」

言っているんだ。

「だからそれを否定するために、『称汰』になっていたんだとこいつは、

「だから」

何を言っている？

「別れた」

俺は違う？

兄さん？

誰だそれは。

「言っている意味、が……」  
重なる？

「…………『勇汰』」  
頭が痛い。

「おまえは『称汰』じゃない。『勇汰』なんだ」  
働かない。

「目を覚ませ」  
違う。

「おまえは『称汰』じゃない。違うんだ」  
何も違うわない！

「称汰……………」

呼ぶな。

その名前を呼ばないでくれ。

「呼ぶんだ。美里が呼ぶんだ……………俺は『称汰』じゃなくちゃいけないんだ」

でないと愛されない。

美里が愛しているのは『称汰』だけなんだ。

やっと死んだのに。  
なのに。

美里は『称汰』しか見ないんだ。

「勇汰、悪かった」

あいつが俺の名前を呼ぶ。

そう、あの時まで確かに勇汰だった。

＊

勇汰はドアノブに手をかけた。

美里が呼び止めるように声をかける。

「また来てね。『称汰』……………」

そうか。

美里の愛を手に入れるには俺が『称汰』になればいい。

勇汰は笑った。

＊

でもだめだった。

結局。

その愛は兄、称汰にしか向けられなかった。

三ヶ月前のあの日から。

そしてその前から。

永遠に美里は称汰しか愛さない。

例えばどんなに似ていても、その愛はその俺をすり抜け称汰に届け

られた。

これじゃあ。殺した意味がないじゃないか。  
演じてきた意味がないじゃないか。

母さんと父さんが離婚した意味がないじゃないか。

ゆうみが、ゆうみを傷つけた意味がないじゃないか。

こんなことなら。

こんな事になるならあの時、称兄の背なんか押さなければよかった。

最後の最後まで、称兄は俺を信じてくれていた。

陰で美里に愛されている称兄を憎んで、妬んでいたことも知らずに。

「なんで、許してくれたんだよお……っ」

知った後でも俺を愛してくれたんだ……。

血まみれの手で俺の頬と頭をなでしてくれたんだ。

『怪我は無いか………？』

本当に、バカだ。

\*

「勇汰、行こうぜっ」

称兄が勇汰の手を引く。

向こうの車線では美里が手を振っていた。

称兄も幸せそうに手を振っていた。

「あ、赤になっちまった」

車が行き交って向こうが見えない。

勇汰の心が弾んだ。

今なら、そう思った。

気がついたら手が出ていた。

思ったより簡単だった。

称兄は乗用車にひかれて死んだ。

辺り一面に広がる赤が勇汰の罪を咎めるように広がった。

「しょうたああああああああああああああっ！！！！」

白くて綺麗なスカートが赤に染まる。

勇汰はしゃがみ込んだ。

足に力が入らない。

体全部に力が入らない。

「しょ、にー？」

近づくとまだ息があった。

「おお…………ゆ、た」

涙が流れた。

早く救急車を呼ばないと。

「称汰！ 称汰！ 称汰！」

美里が叫んでいる。

「待ってて今きゅ、急車、を…………」

手が震える。

どんどん冷えていく。

「ゆう、た」

怖い。

「怪我はないか…………？」

だから称兄は愛されたんだ。

「いやあつ！ しょうたあああああつ！」

そして崩れた。

美里は崩壊した。

称兄という支えを失い脆い柱は崩れた。

「残念ですが」

何が残念なのか。

勇汰はボーとする頭の中思った。

そしてそのすぐ後、美里は倒れた。

歯車が外れた。

自分が殺したはずなのに。

胸にぽっかり穴が開いたような思いが勇汰を蝕んだ。  
もういないんだ。

\*

「勇汰、帰ろう？」

あいつが勇汰の肩をつかむ。

さわるな。

でも力が出ない。

体中の力がゆけていく感触はあのと一緒のように勇汰をおそつた。

忘れていた真実。

俺は誰でもない。

美里の愛する人じゃない。そして『称汰』じゃない。

俺自身が壊した幸せ。

あの海での二人を壊したのは俺自身。

『ほら行くぞ』

俺の手を引いてくれた人はもういない。

俺を愛していてくれた人はもういない。

そう、自分で壊した。

全ての不幸の連鎖は俺が巻き起こした……？

称兄が死んだのも。

美里が死んだのも。

あいつと母さんが離婚したのも。

母さんが倒れたのも。

全部。

俺のせい？

本当にバカだ。

それでも美里を愛している俺は。

それでも称兄が妬ましい俺は。

それでもあいつを憎まずにはいられない俺は。

本物の大馬鹿野郎だ。



## 第4章   そして彼は前へ進む（前書き）

やっと終わりました！。

なんかこじつけくさい終わり方になっちゃったなあ。

## 第4章　そして彼は前へ進む

父さんと帰った家はひどく懐かしく思えた。  
もう永遠にないと思っていたことが今起こっている。

勇汰は何も言わず父を見つめた。

少し前見たときよりも痩せた頬は自分の過ちを責め立てていた。  
償う方法が見つからない。

そしてどう生きればいいのかもわからない。  
死んだ方がいいのかもしれない。

「なあ、勇汰。明日釣りにいこうか」

父さんが唐突に勇汰に話しかけた。

優しく、包み込むように言われた勇汰は静かに首を横に振った。

そんな気分じゃなかったし、そんな資格はないと思った。

寂しさがこみ上げる。

自分には何も残っていない。

「………… おまえの兄さんはな、お前が美里ちゃんのが好きだっ  
て言うことをしていたんだ」

父さんの顔を見つめる。

嘘だ。

そんなわけがない。

勇汰はまた急いで視線をそらした。

父のまっすぐすぎる瞳が、今の勇汰には辛かった。

「でもな称は笑った。そうだろ、美里はかわいいからな、てな」  
妬みも恨みも悲しみも、称兄にはいらぬ。

必要なのは喜び、楽しみ、そして美里と勇汰への愛だけ。

勇汰の瞳からは涙が漏れる。

俺はそんな偉大な人を殺した。

この手で、この心で。

裏切った。

罪悪感、喪失感、全てが押し寄せる。

「だからいつもお前の手を引いて歩いたんだ」

父さんは笑った。

「『美里はあげられないけど、美里との思いではやれる。けど、これを言ったら勇汰は遠慮するだろうな。あいつは優しい奴だから』」  
父さんの声なのに。それは称兄が俺自身に語りかけているようだった。

やり直せるだろうか？

称兄は許してくれるだろうか？

俺が幸せになることを。

前に進むことを。

そして、生きていくことを……許してくれるだろうか。

父は勇汰を抱きしめた。

「ごめんな。俺は弱虫だから。もう誰かが死ぬのなんか見たくないんだ」

父の目からは止めどなく涙が流れた。

勇汰はその涙を見つめた。

あふれては落ちる。たまれば落ちる。

「称が死んで美里ちゃんまで居なくなってしまった。俺は勇汰まで失いたくなかったんだ」

それから父さんは謝り続けた。

いいんだ、俺が悪いだけなんだから。

明日は母さんに会いに行こう。

そして全てを話そう。

もう遅いかもしれない。手遅れかもしれない。  
でも、

きつとわかってくれる。

俺はそう思っている。

勇汰は称汰と美里が写っている写真を見つめた。

「ごめん。そしてありがとう」

次にゆうみが会いに来たらそう言おう。

その思いには答えられないけど。精一杯返そう。

勇汰ははにかみながら言った。

まだ時折俺は『称汰』のような気分がする。

鏡を見たりするときなんかとくに。

だけど、大丈夫。乗り越えられる。

俺には愛してくれる人がいる。

愛する人がいる。

記憶の中にいる残像は俺を静かに見た。

もう大丈夫。

記憶の中の美里は称兄と幸せそうに、あの夏の浜辺に居た。

幸せそうだった。

夏に日差しが勇汰の肌を焼いた。

やけどするくらい熱い砂浜には美里と称兄がいるように思えた。

それがとても懐かしくて、勇汰は目を閉じた。

前を歩いた。

e  
n  
d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5602a/>

---

カサなるキオク

2010年10月10日04時28分発行